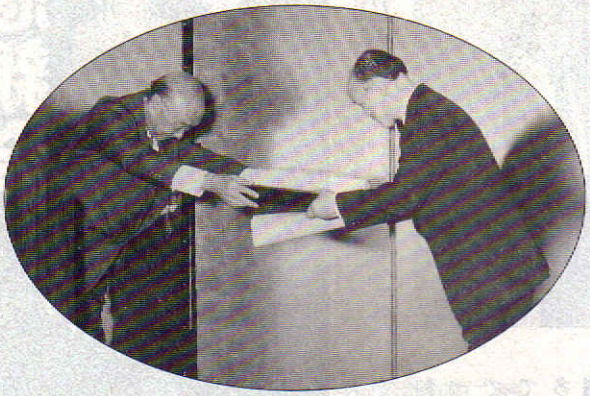


茗渓会館へ感謝をこめて

毎年、東京同窓会の開催を茗渓会館で行っています。ここに多年にわたる過大なるご尽力を感謝して、感謝状と記念品を贈ります。

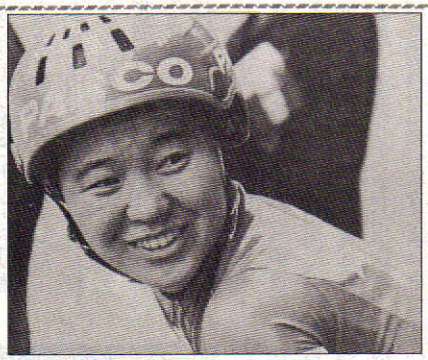
母校の徽章を胸に

「年に一回、同窓会の折にでも目に触れてもらえば……」と神馬同窓会会長より、板倉東京同窓会会長に、同窓会会旗が贈呈された。

ひと

新たな一歩へチャレンジ

鈴木　裕美子選手



自転車競技の鈴木裕美子選手である。

昨年のソウル・オリンピックの出場切符を賭けた全日本選手権で、スケートの橋本聖子選手に負けてしまった。あの試合をテレビで応援された方もさぞ残念に思ったにちがいない。ましてや母校の卒業生となると力が入るのも当然である。

鈴木さんは能代高校を54年卒業の31期生。在学時はスキーの選手として活躍したそうだが、日本大学時代に自転車に転向。その頃よりメキメキ実力をつけ、女子の自転車レーシングチームに力を入れているパルコに入社。その後も順調に銀輪の女王の座を制していた。

ソウル出場に破れたとき〝負けたときが始まりだった〟と、この日すでに次の目標を決めたという。

今年5月の全日本選手権大会で、千メートル・タイムトライアル、スプリントの2冠を得、女子としては初めてフランス・リヨンで行われた世界選手権に参加。

そして今後は、誰もが願うように次回のバルセロナ・オリンピックに向けて、彼女の可能性を一層、磨いてほしいものである。

懇親会

乾杯の音頭

藤田成孝

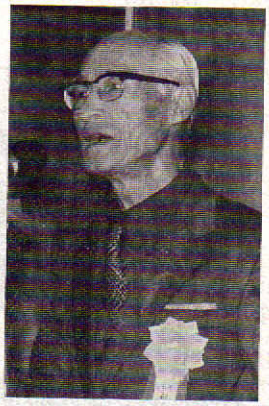
旧制1期の藤田でございます。もう77歳、喜寿を迎えようとしているところでございます。

今日この盛大な会にお招きいただき、ありがとうございます。みなさんもこれから大いに、母校またみなさんの発展のために頑張っていただきたいと思います。能代高校の名誉のために乾杯します。乾杯！

高橋直三先生

思いがけなく東京同窓会のみなさんにお招きいただき、ありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

私が能代高校に赴任したのは、昭和21年の4月でして、能代高校を去ったのが35年の3月でございます。ですから14年もいたことになるわけです。在職中の能代高校には非常に多くの思い出がございます。



とりわけ赴任した当初の終戦後の校舎の状態は思い出深いものです。そのころの校舎は、おおざっぱに申し上げますと、ガラス窓にガラスがほとんど入っていなかったということ、教室や廊下の板がところどころ穴があいていた、それから暖房がほとんどされていなかったなどです。

それじゃどういうふうに寒さを防いでいたかというと、例えば職員室には大きな囲炉裏がありまして、それに手あたりしだい材木をくべて燃やしたんです。ですから校舎中煙でいっぱいで、目に沁みたりして、想像を絶するような校舎の状態でした。

それにさらに困ったことには、教科書はいちおうありましたが、ちょうど郷土の北羽新報の大きさで、いわゆるタブロイド版に印刷されており、それをナイフで切って4つに折って使っていたというわけなんです。

私は理科の担当でしたが、試験管1本、試薬ひとつなかった状態で、いま考えるとすごい教育をした、前代未聞だと思っております。現物教育であるべき理科に〝物〟がなくて、ほんとうに困ったということを今でもハッキリ思い出すことができます。

にもかかわらず、その当時在校された方々が今ここにもおられますが、苦労なさったが非常に立派に成長なされて、堂々たる地位についておられるということは、いかに個々努力されたかということを物語っていると、今感じているところであります。

本当に、何があっても長く勤めた学校というものは、いつまでも忘れることができません。野球が勝った、負けたと今でも関心をもって、能代高校に愛着を感じております。もちろんこのことは今後も続くと思いますけれど、ひとつ言わせてもらえば、もうちょっとスポーツでも能代高校の名声を高らかに上げてほしいと思っているしだいです。

柴田重行先生

柴田でございます。本日ご招待いただきましたこと、厚くお礼申し上げます。私の在職期間は、さきほど高橋先生が言われましたすぐその後、25年から40年までの15年間能代高校にお世話になりました。

実は、私も能代高校の同窓生の一人でございます。昭和15年能代中学に入学しまして、20年卒業です。そういう意味からも、本日出席いただいている方々の先輩として、後輩として、いろいろ熱い思いがします。

私の中学時代は、能代中学ができた当初の校舎に入学しました。教わりました先生方のなかには、もと同窓会会長の吉武栄一さんがおられました。それから先輩の方々にはお分かりかと思いますが、剣道の武衛先生、あるいは体操の太田口先生などに、私はずいぶんしぼられた者の一人でございます。

19年はあの懐かしい校舎が樽子山から消えた大火の年でした。私が奉職しました25年の頃は、ようやく戦